



「先代の時から通ってください  
いる患者さんになると30年を超え  
ています。そんな患者さんを長く  
診られるのは正直、有難いですし、  
地域に必要とされている実感があ  
ります」

藤木院長はそう振り返る。しか  
し一方で、一人の患者を長く診てき  
が、たとえばがんで亡くなるよう  
なことがあると、慢性炎症からの  
変化を見逃したのは自分の責任  
ではないかとさえ感じます。当院  
ではそんなことから、がんを研究  
することが慢性炎症の治療につな  
がると考え、特にがん治療に力を  
入れるようになりました」

ただけにそれなりの  
責任を感じることも  
多い。

「最初は血圧だけで  
かかっていた患者さん  
が、他の慢性疾患にな  
り、やがてがんを発症  
することがあります。  
その経過だけみると、  
慢性疾患からがんに  
発展するケースは非常  
に多い。私自身、がんを  
専門的に研究すれば  
するほど、慢性疾患は  
最終的にがんに収束  
するのではないかと  
思いを強くしています。  
それを強く通ってい  
ただいている患者さん

### 独自のがん集学的治療で 存在感

藤木院長は、がん治療との出会  
いをそう語る。

藤木病院が現在、取り組んでい  
るがん治療は、生体にできるだけ  
ダメージを与えずに治療効果を発  
揮する「個別化がん集学的治療」  
だ。なかでも、低用量化学療法と  
<sup>※1</sup>ハイパーサーミアと呼ばれる温熱  
治療、そしてがんの栄養代謝療法  
をセットにして有機的に統合した  
治療を行っているのが大きな特徴  
である。これら独自に行っている治  
療を求めて、患者は地元はもとよ  
り県外からも訪れる。

低用量化学療法とは、通常の抗  
がん剤使用量の2分の1から3分  
の1の量で治療するもので、副作  
用を大きく軽減するといわれてい  
る。ハイパーサーミアとは電磁波を  
使って腫瘍を加熱する療法で、直  
接的な温熱効果と、がんの増殖に  
傾くたんばく質を補正しがんの環  
境を改善する。藤木病院の温熱療



ハイパーサーミア(温熱治療)室

※1 ハイパーサーミア 温熱治療と呼ばれる治療法で、がん細胞の温度だけを選択的に上昇させて死滅させる治療法。  
※2 栄養代謝療法 食事療法によって、人が本来持っている自然治癒力を向上させる治療法。



## 病院の多機能化とがん治療で 地域の医療と福祉を守り抜く。

今年、創立70周年を迎えた藤木病院は医療と介護を両輪に、  
在宅を含めた小規模多機能病院として地域に根差している。  
高齢化が進む地域にあって医療と介護が一体となったサービスは不可欠。  
がん治療に特化した専門的な医療を展開し、県内外から患者が訪れている。

### 親子二代、 地域を支えて70年

高齢化や人口減少が進み、地域  
の中小病院はどこも厳しい経営  
を迫られている。そのなかにあつて  
地域に長く根差し特徴ある医療  
を展開、介護や在宅との有機的な  
連携を図って時代を先取りした  
経営を続けている病院がある。富  
山県の立山町に本拠を置く、藤木  
病院だ。

昭和22年(1947)に藤木医  
院として開設以来、先代が36年、  
長男で現院長の藤木龍輔院長が  
引き継いで34年、トータル70年にわ  
たつて地域の人たちの命と健康を  
守っている。大学病院や拠点病院  
など急性期の総合病院との大き  
な違いは、一人の患者を長きにわた  
り診れること。なかには20年、30年  
通い続ける患者もいれば、親から  
子へ、子から孫へ二世代、三世代に  
わたる、文字通り「地域のかかりつ  
け医」としての役割も果たしてき  
た。ある意味それが、地域になくて  
はならない存在価値になっている。

法は、独自の温熱増感療法を行っ  
ており、従来の温熱療法を上まわ  
る治療効果を上げている。平成16  
年の治療開始より、のべ施行者数  
は12,000人におよぶ。三つ目  
の栄養代謝療法とは、がんの嫌気  
性代謝によって体が酸性化しない  
ように、有機ヨード治療、食事療法  
などによって微量元素の異常や血  
糖異常を抑える。藤木病院ではこ  
れらの治療法を組み合わせるこ  
とによって、副作用が少ない効果的  
ながん治療をめざしている。

加えて、地域の病院として藤木病院が今、存在価値を強めつつあるのは、医療から介護、福祉施設、在宅を含めた小規模多機能病院であることだ。医療と介護を二元的に管理していくことが、これからの地域の中小病院に欠かせないとして、藤木病院はグループとしていち早く小規模多機能に切り替えてきた。

「高齢化と人口減少が進む地域にあつて、これまでと変わらない医療サービスを供給していくには、われわれ自身が時代の変化に対して常に変わり続けることが大切です。小規模多機能に切り替えたのは、病院と介護施設を含めて法人内では250人が収容できる施設規模を整え、それ以外の部分で医療から介護、在宅を支援できる組織づくりが重要だと考えたからです。そうした観点から当グループでは一般病床からケアハウス、老健、サービス付高齢者住宅、訪問看護まで二元的に管理し、在宅であつても病院、介護施設にいても、いつでも診て治療して、なにかあれば入



「保険適用の対象となる標準治療を中心にしています。当院独自もいえるのは、化学療法についてはすべて低用量で行い、しかも夜間投与を原則としているところだと思います。がんは夜間に増殖するといわれています。それを抑えるためには夜間に投与するのが効果的であること。もう一つは、患者さんが寝ている間に抗がん剤投与が終つてしまうので吐き気などの副作用も少ない利点があります。副作用も少ない利点があります。低用量にすることで分子標的薬のような効果が期待できますし、ハイパーサーミアや、生体内の低酸素状態を改善する高気圧酸素療法<sup>※3</sup>、栄養代謝療法などを併用することで副作用を少なくし、がんの増殖を抑えられます」

藤木院長によれば、がんは生活習慣や環境因子によるところが大きく、特に「慢性炎症の一つである



藤木 龍輔 ふじき・りゅうすけ

Profile

医療法人財団恵仁会 藤木病院 院長

- 1979年 北里大学医学部 卒業
- 1983年 医療法人恵仁会理事長 就任
- 2013年～金沢大学医学部環境生態医学講座講師、  
兵庫医科大学先端医学研究所細胞・  
遺伝子治療部門講師、  
富山大学医学部基礎放射線講座非常勤講師

院できる環境を整えています。小規模で多機能な形態を整えることが、これからの地域医療を支えていく上で必要とされる時代になったということだ。

藤木院長は、医療と介護の二元管理のメリットについてそう言及する。そのほか医療面では、先代の時代から「夜間や休日でも休まず往診し、急な患者にも対応していた」ことから、救急医療を含めて24時間365日、地域の患者を診る体制もつくりあげている。

その底流には、藤木院長自身の

「地域の医療を支えていくためには介護、福祉、在宅と有機的に連携していくことが、地域の人々のニーズに応えることであり、開院から70年に渡って培ってきた藤木病院の使命」という考え方がしっかりと根付いている。

そして藤木院長自身が、その使命感を達成するためにライフワークとして取り組んできたのが「がん治療」なのである。



「Toward the 100<sup>th</sup> 病院も住人も100歳長寿センテナリアンを目指します」



高気圧酸素治療室

糖尿病、高脂血症、肥満、メタボリック症候群をいかに抑えるかが、がんの予防と密接に関係している」と指摘する。

小規模多機能で地域をけん引

藤木院長はがん集学的な治療を推進している理由として、次のような考え方を大事にしている。「100歳の高齢者を参考に研

究しています。がんは今や日本人の2人に1人がかかり、3人に1人が亡くなる時代。多細胞生物である人間にとつてがんは避けられない宿命です。しかし100歳まで元気で長生きしている人は、少なくとも100歳までがんを発症しなかつたわけです。その人の生活習慣とか普段の食事、運動、生き方、モノの考え方を分析すると、血圧が高くても糖尿病であつても非常に前向きで、いろんなことに感謝して生きているほどがんになりにくい。ですからその人にあつた治療法を見つけるとともに、周りに感謝してこやかに生きる。あとは食べ物と身体を動かしている。がんは日常生活習慣から出てきた病気で、その人の全体を見ないとなかなか治せません。今あるがん、これから出てくるかもしれないがん、それをすべて抑えるにはやはり集学的に治療しなくてはできないと体質にもつていく。そうしないとなかなか治療効率は上がらないと思います」

こうした専門的ながん治療に

※3 高気圧酸素療法 圧力の高い部屋で全身に酸素を供給し、病態の改善を図る治療法。